



30th ANNIVERSARY

MIE
PREFECTURAL
ART MUSEUM
NEWS

開館30周年を締めくくる記念すべき展覧会は、〈コレクションの全貌展〉。特色あるコレクションを築き、後世に繋げてゆくことは美術館の使命です。他方、美術界の動向に目を向け、紹介することも大切にしています。心に響いた作品との再会と、記憶に残る新たな出会い。いずれをも予感させる場であり続けるため、これからも美術館は活動を積み重ねてゆきます。

〈アジアをつなぐー境界を生きる女たち1984-2012〉、4月13日開幕です。(Mm)

展覧会スケジュール

■企画展示

コレクションの全貌展

PART1:2013年1月4日[金]-2月11日[月・祝]

PART2:2013年2月14日[木]-3月24日[日]

観覧料:一 般 500(400)円

高大生 400(300)円

小中生 無料

()内は20名以上の団体料金

●当館学芸員によるミニ・ギャラリートーク

当館学芸員が、コレクションについて解説します。

日時:1月13日[日]/27日[日]

2月3日[日]/10日[日]/24日[日]

3月3日[日]/10日[日]

いずれも午後2時から(それぞれ30分程度)

詳細は決まり次第ホームページでお知らせします。

アジアをつなぐー境界を生きる女たち1984-2012

2013年4月13日[土]-6月23日[日]

観覧料:一 般 900(700)円

高大生 700(500)円

小中生 400(300)円

()内は前売りおよび20名以上の団体料金

■常設展示

美術館のコレクション

【第IV期】2013年1月4日[金]-3月31日[日]

【第I期】2013年4月2日[火]-6月30日[日]

柳原義達記念館 柳原義達の芸術

【第IV期】2012年12月18日[火]-2013年3月17日[日]

※展示室Aでは「元永定正受贈作品展」を開催します。

【第I期】2013年4月2日[火]-6月30日[日]

※展示室Bでは下記日程で「特集展示 八島正明」を開催します。

特集展示 八島正明

2013年3月20日[水・祝]-6月30日[日]

■メールマガジン 購読料無料

三重県立美術館の最新情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

三重県立美術館 〒514-0007 津市大谷町11

Tel:059-227-2100 Fax:059-223-0570 <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

三重県立美術館ニュース 30周年記念特別号

■発行日:2013年3月3日(禁・無断転載) ■企画・編集・発行:三重県立美術館

■原稿末尾のイニシャルについては以下のとおり:生田ゆき(Iy)、井上隆邦(It)、鈴村麻里子(Sm)、原舞子(Hm)、道田美貴(Mm)

■表紙の作品:シャージア・シカンドル《SpiNN》(部分) 2003年 福岡アジア美術館蔵 ■デザイン:豊永政史

利用のご案内

■開館時間

午前9時30分-午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

月曜日(祝日休日にあたる場合は開館、翌日閉館)

※ただし4月30日(火)は開館[5月7日(火)、7月16日(火)、9月17日(火)、9月24日(火)、10月15日(火)、11月5日(火)、2014年1月14日(火)]

年末年始[2013年12月24日(火)から2014年1月3日(金)]

■観覧料

【常設展示の場合】

〈美術館のコレクション+柳原義達記念館〉

一 般 300(240)円

高大生 200(160)円

65歳以上の方、小・中 生 無料 ()内は20人以上の団体料金

【企画展示の場合】

その都度定めます。

ただし、学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、身体障害者手帳をお持ちの方および付き添いの方1名が観覧する場合は無料。

■交通

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、循環津駅西口(つつしが丘、むつみが丘経由)行き、総合文化センター行き2分、美術館前下車 ※できる限り公共交通機関をご利用ください。





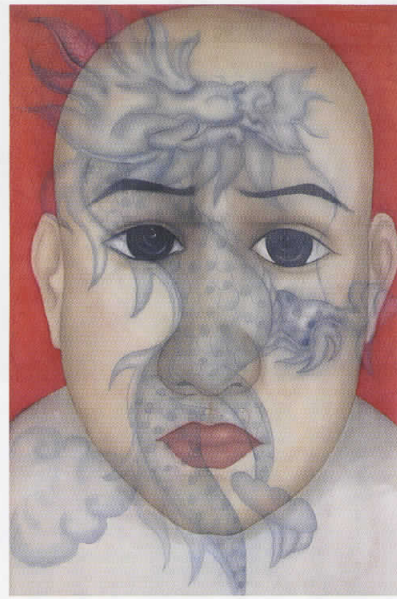
4



3



2



1

開館30周年記念事業を終えて

開館30周年記念のメイン事業であった「蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち」展そして「KATAGAMI Style 世界が恋した日本のデザイン」展が昨年無事終了し、この一文が出る頃には、記念事業の締めくくりとして「コレクションの全貌展」が開催されているのではないのでしょうか。

一連の記念事業を企画する上で、特に留意した点は三重とのかかわりを重視することでした。この点を念頭に置きつつ、できるだけ新しい視点で斬新な内容を心掛けたつもりです。お蔭さまで冒頭に掲げた二つの展覧会は好評を博し、多くの方々にご来館いただきました。

この30年を顧みるに、様々な出来事がありました。開館当時は350点ほどだった所蔵作品も今では5000点を超えました。また、この30年に開催した企画展は、470本を超えています。組織面ではこの数年の間に、新人学芸員3名が加わり、次の10年、20年に向けての布陣も整いつつあります。

美術館ではこの30年間、日本の近代洋画、そして、日本の近代洋画に大きな影響を及ぼした西洋美術、更には三重ゆかりの作家を三本柱として位置づけ、作品の収集や企画展を開催してきました。今後はこうした方針に加え、美術の国際的な潮流や来館者のご要望なども加味しつつ、さらに事業の幅を広げたいと考えております。この四月から始まる「アジアをつなぐ―境界を生きる女たち 1984-2012」展や、その後に開催予定の現代美術展「三沢厚彦 ANIMALS 2013 in 三重」展などは、こうした考え方に沿った事業です。ご期待ください。

人の人生でいえば30歳は壮年期の入り口です。これからがまさに活躍の時代です。同じことが美術館運営に関してもいえるのではないのでしょうか。今後とも職員が一丸となってさらに魅力的な活動を展開してゆきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。(三)



5



6

1. グエン・ティ・チャウ・ザン《わたしは龍》2012年 福岡アジア美術館蔵
2. レー・ホアン・ビク・フオン《タチアワユキセンダングサ》2012年 アンジェラ&ニコラス・カーティス氏蔵
3. ニエ・レイ《制限された事柄の関係性》2010年 福岡アジア美術館蔵
4. 塩田千春《Wall》2010年 福岡アジア美術館蔵
5. 三沢厚彦《Animal 2011-05》2011年 撮影:永野雅子
6. 三沢厚彦《Animal 2007-03》2007年 撮影:内田芳孝

「アジア」×「女性」×「アート」が紡ぎ出すもの

アジアをつなぐ―境界を生きる女たち 1984―2012

2013年4月13日(土)―6月23日(日)

「アジアをつなぐ―境界を生きる女たち 1984―2012」展は、国内4か所の美術館を巡回し、総勢50人のアジアの女性アーティストによる作品を紹介する大規模展です。2012年9月に福岡アジア美術館で立ち上がり、その後は沖縄県立博物館・美術館、栃木県立美術館と続き、当館が最終会場となります。展覧会開催の経緯や展示される作品内容は少ない字数では紹介しきれませんので展覧会本体およびカタログをご覧ください。ここではこれまで3つの会場で開催されたイベントについて触れたいと思います。

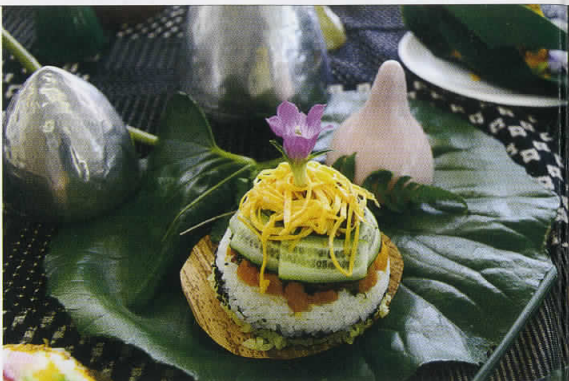
展覧会の第一会場となった福岡では、初日にアーティストトークが行われました。この日のために韓国、台湾、パリ、沖縄、奈良、東京から7人の作家が駆けつけ、作品を前にそれぞれが制作にかける思いを熱く語りました。扱うテーマ、素材も、世代や活動場所も異なりますが、自身がいま立つ場から社会を見つめ、声を発するアーティストたちの姿勢には共通するものがあることを再確認する場となりました。

同日にはイトー・タリー(日本)



による2つのパフォーマンス公演も行われました。沖縄の基地問題や福島原発事故による放射能汚染問題など、私たちが生きる社会に横たわる問題を露わにする渾身のパフォーマンスは、沖縄、栃木の両会場でも公演されました。

ピナリー・サンピタック(タイ)による創作料理のワークショップ「おっぱい塔クッキング」では、作家の主要モチーフである乳房をかたどった料理用の型を使い、参加者は自分だけのオリジナル料理を創作します。みな驚くほど個性豊かな「作品」を作り、完成後は全員で試食会を行いました。食べ物や人々を結び、つなげ、あらゆる境界を消していく―展覧会タイトルとも連動したこのワークショップは三重会場でも開催予定です。



このほか、アルマ・キント(フィリピン)による布を使ったワーク

ショップ、作家や研究者を迎えたシンポジウム、映像作品上映会なども各会場で開催されました。三重会場でも関連イベントを多数開催します。「アジア」×「女性」×「アート」に「わたし」を掛け合わせて見えてくるものは・・・その先へと豊かに広がる美術の可能性を感じてみてはいかがでしょうか。ぜひ展覧会、イベントに足をお運びください。(Hm)

1 イトー・タリーのパフォーマンス「放射能に色がついていないのかもしれない」と深い溜息を吐く(福岡アジア美術館、2012年9月)
2 ピナリー・サンピタックによるワークショップ「おっぱい塔クッキング」(福岡アジア美術館、2012年10月)

三沢厚彦展

三沢厚彦 ANIMALS 2013 in 三重

2013年7月13日(土)―9月23日(月・祝)

人間にとって身近な存在である「動物」。しかし「動物」と一口に言っても、彼らと私たちの関わり方は実にさまざまです。家で飼うペットから、動物園や図鑑で見られない猛獣肉食動物、果ては人間の空想が呼んだ架空の動物に至るまで、彼らとの出会い方は100種類以上の動物がいればまさに100通りといったところでしょうか。そんな「動物」をテーマに、美術の世界で近年めざましい活躍を見せているのが三沢厚彦(1961)です。三沢は2000年から動物をモチーフとした木彫の「アニマルズ」シリーズの発表を始め、その独特の世界観で一躍注目を集めます。

2001年に平櫛田中賞を受賞した彼は、その後も各方面から高い評価を得ながら、今日に至るまで精力的に個展を開催し続けています。素材でユーモラス、でもどこか素っ気なくて、時にちょっぴり生意気な動物たち。鑿跡を残し表面に油彩を施したその作品は、未だ褪せない樟の芳香をまといながら、鑿を打つリズムや音をそのままとどめているかのようです。

三沢の作り出す動物たちは、



実物に違わぬ大きさではあるものの、必ずしも実物そっくりには仕上げられていません。「写実性は求めていないんです。」三沢は語ります。「例えばクマは、実際は猛獣な動物ですが、僕たちはキャラクター化されたクマやティベアなどのかわいらしいイメージをもっています。そういうイメージと実際のクマ、すべてが入り混じったものが、その動物の「らしさ」だと思っています。僕はそのリアリティを大事にしています。」*

彼の作品に親しみを覚えるのは、それが私たちの心のなかに住む動物像に深く共鳴するところがあるからなのでしょう。むしろ、頭のなかでもややもやと思いついていた「動物」の印象が、三沢作品との出会いを通してはじめて明瞭なかたちを帯び始めるとさえ言えるかもしれません。そんな魅惑的な動物たちが集結する展示室の空間構成を手がけるのは、近年三沢とのコラボレーションで斬新な空間を生み出し続けているgun projectsの豊嶋秀樹。三重県立美術館の展示室が、いったいどんな変容を遂げるのか―ぜひいつもとは少しちがう美術館を楽しみにしていただければと思います。(Sm)

* アトリエ訪問「美術準備室」創刊号、2012年4月、0頁より引用。
3 三沢厚彦《Animal 2012-013》2012年
4 三沢厚彦《Animal 2011-07》2011年 撮影 永野雅子

2012年の美術館の秋はKATAGAMIで明け、型紙に暮れました。企画展示室では「KATAGAMI Style」展が、県民ギャラリーでは「極小の宇宙」展が開催され、三重県ゆかりの伝統工芸である伊勢型紙が、全国へ、そして世界へと広がり、愛されてきた様を存分に堪能いただけたことと思います。

その余韻冷めやらぬ11月も半ばを過ぎたころ、私の足はニューヨークへ向いていました。クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館所蔵の型紙の調査が目的です。

同館はアメリカ唯一の、デザインを専門とする「国立」博物館として、グッゲンハイム美術館やメトロポリタン美術館など、錚々たる文化施設が軒を連ねるミュージアム・マイルと呼ばれる地区の一角を占めています。その型紙コレクションは、数にして375枚。大半が使用済みの小紋の型紙で占められる中、浴衣を染めるために用いられた中形ちやうがたと呼ばれる大判の型紙には、松や、波濤はたう、団扇うちやうせんなど、日本の伝統的な文様を大胆に配した斬新な文様が躍り、強い光を放っていました。

型紙は、制作者や年代を示す情報が残されていることが稀なため、技法的な特徴や、型紙を扱った商人の屋号が記された「商印」が研究の大きな手掛かりとなります。クーパー・ヒューイット博物館の型紙においては、「室入むろいれ」という乾燥手段が用いられていること、「紗張しやばり」という補強技術が施されていないことなどから、明治から大正初期のものではないかと推測されます。商印からは、圧倒的な供給地であった「伊勢」「白子」、消費地の「江戸」などの地名に加え、

「栃木」という見慣れぬ文字も確認できました。所蔵先の資料によれば、この型紙の寄贈者には訪日記録があることから、それらを洗いなおすことで、購入の経緯について新たな情報が得られる可能性も出てきました。

当初は型紙のみの調査が目的でしたが、日々型紙を相手に悪戦苦闘する私の姿を見てか、先方の学芸員たちは、次々に新たな資料を広げてくれました。藍染めの古裂、所蔵者や発行者情報が記された小紋や更紗の見本帳など、身を乗り出すほどに貴重なもののばかりでした。聞けば、型紙もこれらの資料も、すべて寄贈されたものだったこと。アメリカ文化を支える成熟した市民像に感じ入るよりほかありません。

型紙研究において、調査は基本であり、すべてです。何百何千という単位で所蔵される型紙の中には、さして興味を引くこともない、凡庸なものと映るものも含まれていることもあるでしょう。しかし、それらの一つ一つ丹念に拾い上げ、型紙が漂う広大な海に杭を打つかのごとく、記録を残していくことは、やがて大きな地図を作るとき、確かな道標になってくれるに違いないと信じています。いつの日か、私の残した調査が誰かの研究の役に立つ日がくるかもしれない。型紙調査には、長い長い時間が流れているのです。(Y)

5 クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館所蔵の型紙に押されていた商印(1976年寄贈)
6 クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館蔵 更紗込込帳(1905年寄贈)
7 クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館の型紙収蔵箱



三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会など、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

■年会費

一般会員：3,000円 入会金：500円

ペア会員：5,000円 入会金：1,000円

■特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額、美術館に関する情報提供のほか、レストラン、ミュージアムショップのご利用にも割引があります。詳細は、三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館協会の賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布、鑑賞団体への援助など、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。協会の主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

■会費

年間一口

個人：25,000円 法人：50,000円

準会員：10,000円

■特典

展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会毎のカタログ贈呈(準会員は除く)や美術館活動に関する情報提供などの特典があります。詳細は三重県立美術館協会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

三重県立美術館ニュース
30周年記念特別号

30th ANNIVERSARY